

井伊直弼

井伊直弼（1815～1860）は伝統芸術の振興、西洋との貿易開放への関与、そして暗殺による早すぎる死などとともに人々に記憶されている。

直弼は彦根藩主の井伊直中（1766-1831）の 14 番目の息子として生まれた。富という名前の彼の母は、直中の側室の 1 人であった。多くの兄がいたため、直弼が彦根藩の藩主になれる可能性はまったく無く、彼は青年期をお寺で勉強しながら過ごした。17 歳で城内の小さな屋敷に移り、直中の 15 番目の息子であった井伊直恭（1820-1888）と一緒に暮らした。

3 年後、直弼より年下の直恭は他家の養子となったが、直弼にはそのような機会はなかった。彼はその後、12 年間をその小さな屋敷で過ごした。その間、直弼は哲学、絵画、詩、書道、茶道、および多くの武道を学んだ。最終的に、彼は自分の住んでいた屋敷を「埋木舎」（ウモレギノヤ）と名付けた。その名前は、当時の有名な詩人の作品の暗示と彼の学問に生きる人生を反映したものであり、まるで沼地のような争いの世界から隔離されたものだった。

しかしその間、直弼の年上の 13 人の兄弟が亡くなったり、他家へ 1 人ずつ養子に入ったりしていった。直元（1809-1845）が亡くなった時、直弼は意外にも彦根藩の世継ぎとして藩主になれる立場になり、1850 年に実際に跡を継いだ。彦根藩主として、また江戸（現在の東京）の幕府内でも地位を得た。わずか 8 年後、直弼は幕政の最高位である大老になった。

1853 年 7 月、アメリカ海軍のマシュー・ペリー提督は、日本への（強制的な）開港交渉のために、4 隻の黒船（軍艦）で江戸湾に到着した。日本は何世紀にもわたって鎖国状態だったにもかかわらず、ペリーは幕府を脅迫して、いくつかの港に米国船を停泊させる条約に署名させることに成功した。1855 年、タウンゼント・ハリス米国総領事が、完全な貿易協定を交渉するために到着した。井伊直弼はその後すぐに大老に任命され、交渉の責任者となった。攘夷思想が高まり、この問題について天皇に相談する必要があると考え、彼は決断を先延ばしにしようとしたが、結局直弼とその部下たちの致命的なミスコミュニケーションが条約調印につながってしまった。この決定は、天皇の承認なしに行われたため、日本の尊王派に反対され、直弼は多くの敵を生み出してしまった。時の将軍、徳川家定（1824-1858）は病弱であったため、幕政は家定の代わりに井伊直弼に大きく依存した。反対者への抑圧として、直弼は彼の政策に反対した 100 人以上

の役人と民間人を投獄または処刑した。この手法は安政の大獄（1858-1860）として知られるようになった。井伊直弼の専制的な行動に対して反発が起きないはずは無く、1860年3月3日、17人の武士によって江戸城桜田門のすぐ外で、井伊直弼は暗殺された。彼の暗殺は、桜田門外の変として知られるようになった。